

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書21集

UZURA O NE

鶉ヲネ

長野県佐久市香坂鶉ヲネ遺跡発掘調査報告書

1988

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例 言

1 本書は、昭和62年度市道大ごつ線道路改良事業（高速自動車道関連事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2 調査委託者 佐久市建設部

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査所在地 佐久市大字香坂字鶉ヲネ590、589-1・2・3、591、592、593、599

5 調査期間及び面積 昭和63年3月3日～3月31日 1,200㎡

6 調査団の構成

（事務局）

所 長	西沢正己	調査係主任	高村博文
庶務係主査	畠山俊彦	調 査 係	三石宗一
庶 務 係	田中芳美		小山岳夫

（調査団）

団 長	黒岩忠男（佐久考古学会副会長）
調査指導者	白倉盛男（佐久考古学会副会長）
調査担当者	林幸彦（佐久市教育委員会）、羽毛田卓也（佐久市教育委員会）
調 査 主 任	佐々木宗昭、翠川泰弘
調査補助員	井出百合子、大井恵美子、堺益子、高杉昌子、橋詰勝子、橋詰信子、三石和子
調査協力者	浅沼ノブ江、市川香里、遠藤しずか、金森治代、木島美子、田中夏江、内藤治伸、並木ことみ、橋詰けさよ、星野良子、細萱ミスズ、山崎平八郎、渡辺久美子

7 本書の編集は、羽毛田・翠川が行い、執筆は、土器が翠川、他を羽毛田が行った。

8 本書及び鶉ヲネ遺跡出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

- 1 遺構の略称 J→縄文時代竪穴住居址 D→土坑
- 2 遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりであり、図中にスケールを付した。
 - 1) 遺構 住居址→1/80 炉→1/30 土坑→1/60
 - 2) 遺物 1/6～2/3
- 3 挿図中におけるスクリーントーンは下記の内容の表現である。

地山断面→斜線 炉→点
- 4 遺構の海拔標高は、各遺構ごとに統一し、水糸ラインに水糸標高として明記した。
- 5 重複遺構及び攪乱は、上端のみ実線で表示した。
- 6 挿図中の略記号は次のとおりである。

P→ピット S→石 土層断面図中のP→土器
- 7 写真図版中の遺物の縮尺は、原則として実測図と呼応する。
- 8 遺物番号は簡略し、例えば第14図5は14-5とした。
- 9 写真図版中の遺物番号は、実測図と同じである。
- 10 各一覧表の数値について、現在値は〈 〉、推定値は()とした。
- 11 本遺跡の遺跡の位置と環境については、1987年刊行の『淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I』及び1988年刊行の『茂内口遺跡』に記載してあるので、本書では省いた。
- 12 遺構覆土の色は、農林水産省農林水産技術会議事務所・財団法人日本色彩研究所色表監修1970『新版 標準土色帖』の表示に基づいて示した。

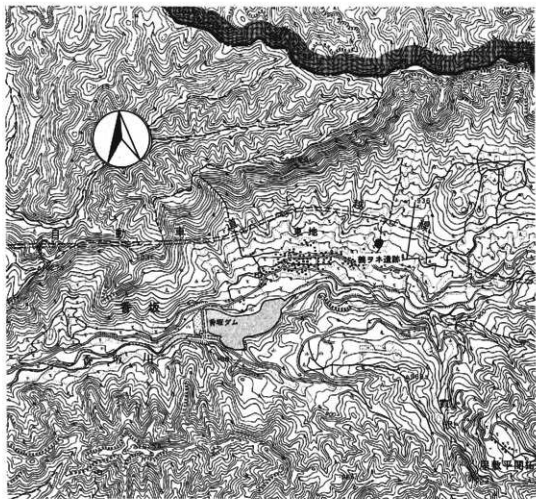
目 次

第I章 発掘調査の経緯	1
第II章 基本層序及び概要	3
第III章 遺構と遺物	4
1 住居址	4
1) 第1号住居址	4
2) 第2号住居址	4
3) 第3号住居址	16
4) 第4号住居址	25
5) 第5号住居址	31
2 土坑	34
1) 第1号土坑	34
2) 第2号土坑	35
3 遺構外及びトレンチ	36
第IV章 総括	39
写真図版	

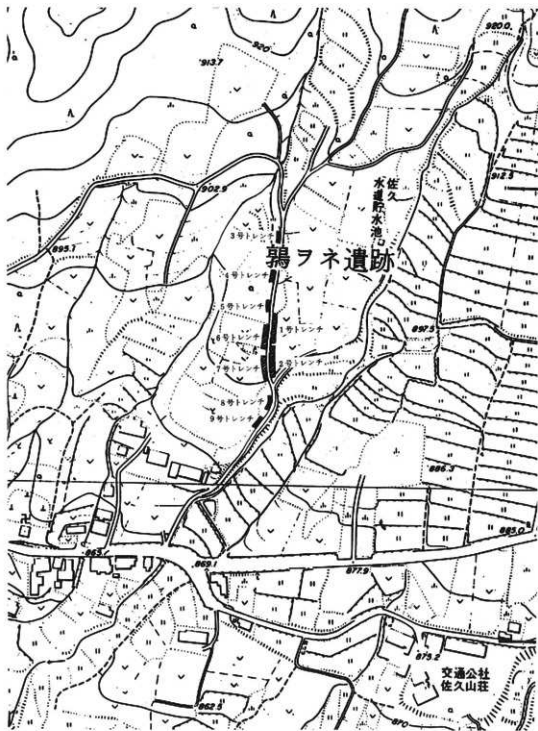
第 I 章 発掘調査の経緯

鶉ヲネ遺跡は、佐久市大字香坂字鶉ヲネに所在する。付近は、険しい八風山系が香坂川に向かってなだらかに傾斜を始める南斜面で、数多くの尾根と微高地を形成する。当然小谷地からは水が滲んでいる。本遺跡は、こうした尾根上に展開する縄文時代の集落址で、標高は880~900mを測る。

今回、佐久市建設部が行う市道大ごつ線道路改良事業に伴い、同建設部と佐久市教育委員会とで協議の結果、本遺跡の破壊を余儀なくされ、緊急に記録保存する必要が生じた。そこで佐久市建設部より委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが主体となって発掘調査する運びとなった。



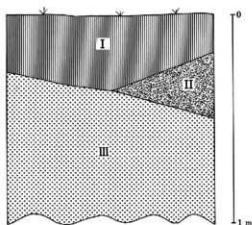
第1図 鶉ヲネ遺跡位置図 (1 : 25,000)



第2図 鶺鴒ノ遺跡位置図及びトレンチ設定図 (1 : 2,500)

第II章 基本層序及び概要

1 基本層序



第3図 基本層序模式図

層序は調査区の全域を通して、第3図の模式図のとおりである。第I層は、耕作及び、森林の影響下で成立した暗褐色土で、第II層は、ローム粒子・パミス中粒以下を少量含む褐色土で、第III層は、パミス中粒以下を少量、スコリアを微量含む明黄褐色ローム層である。なお遺構は、第III層上面において確認された。

2 検出遺構・遺物の概要

- 1) 遺構 竪穴住居址 5 棟 縄文時代中期末葉～後期初頭
 土坑 2 基 縄文時代後期初頭～近代

- 2) 遺物 土器 深鉢・浅鉢・注口土器他
 石器 打斧・石匙・石鏃・凹石・砥石・スクレパー他

第三章 遺構と遺物

1 住居址

1) 第1号住居址

第1号住居址は、調査区のほぼ中央、い・う-4グリッド内において検出され、東側を攪乱に南側を第4号住居址によって破壊される。

平面形態は残存部分が少なく不明である。壁高は残存する北壁で14~17cmを測る。ピットは7個が検出された。P₁は径28×32cm・深さ22cm、P₂は径12×18cm・深さ9cm、P₃は径38cm・深さ50cm、P₄は径21×28cm・深さ14cm、P₅は径28×31cm・深さ35cm、P₆は径30×34cm・深さ23cm、P₇は径33×39cm・深さ51cmを測る。

遺物は、深鉢片と玄武岩の切片、玄武岩製の石錐が出土している。

本住居址の所産期は、第4号住居址が縄文時代後期初頭に位置付けられるため、また出土した土器片が中期末の様相を示す事より、縄文時代中期後葉と考えられる。



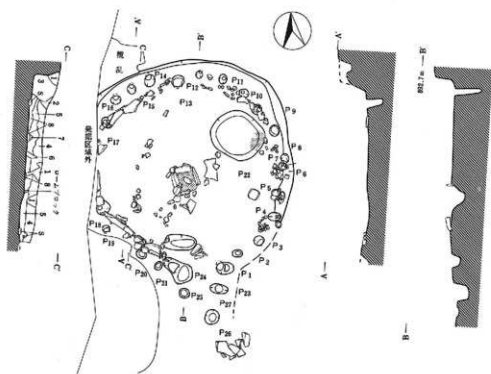
0 (2:3) 3m

第4図 第1号住居址出土
石錐実測図

2) 第2号住居址

第2号住居址は、調査区の北側、あ・い-7~9グリッド内において検出され、北西壁を攪乱に、南西壁を第2号土坑によって破壊される。

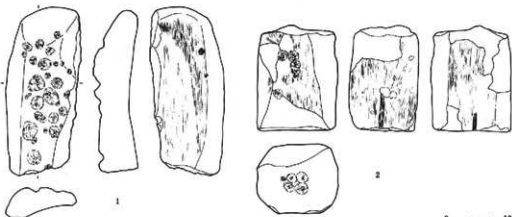
平面形態は円形を呈し、南側に張り出し部を持つ。規模は南北が440cm (張り出し部を含めて580cm) で、東西が推定で456cmを測る。壁高は残存する北壁で38~54.5cm、東壁で11~36cmを測る。ピットは27個が確認された。P₁は径16×24cm・深さ29cm、P₂は径19×22cm・深さ49cm、P₃は径13×15cm・深さ17cm、P₄は径16×27cm・深さ60cm、P₅は径20×24cm・深さ62cm、P₆は径15×18cm・深さ52cm、P₇は径15×18cm・深さ31cm、P₈は径23cm・深さ50cm、P₉は径22×24cm・深さ48cm、P₁₀は径18×21cm・深さ33cm、P₁₁は径17×21cm・深さ55cm、P₁₂は径14×16cm・深さ56cm、P₁₃は径25×28cm・深さ60cm、P₁₄は径22×26cm・深さ50cm、P₁₅は径18×19cm・深さ35cm、P₁₆は径18×21cm・深さ44cm、P₁₇は径20×26cm・深さ59cm、P₁₈は径30×31cm・深さ39cm、P₁₉は径14×15cm・深さ26cm、P₂₀は径16×23cm・深さ34cm、P₂₁は径17×20cm・深さ15cm、P₂₂は径97×109cm・深さ20cm、P₂₃は径26×37cm・深さ39cm、P₂₄は径46×70cm・深さ41cm、P₂₅は径22×23cm・深さ8cm、P₂₆は径30×32cm・深さ23cm、P₂₇は径20×39cm・深さ16cm、P₂₈は径32



- 1 褐色土層 粘性弱し。ローム粒子を少量含む。10YR4/4
- 2 褐色土層 粘性弱し。バミス中粒・ローム粒子を少量含む。10YR4/6
- 3 黄褐色土層 粘性弱し。ローム主体。10YR5/6
- 4 濃い黄褐色土層 粘性やや弱し。バミス中粒・ローム粒子を多量含む。10YR5/4
- 5 暗褐色土層 粘性やや強し。バミス中粒を少量含む。10YR3/4
- 6 褐色土層 粘性弱し。ローム主体。10YR4/6
- 7 暗褐色土層 粘性弱し。バミス中粒を多量に含む。10YR3/4
- 8 暗褐色土層 粘性やや弱し。ローム粒子を微量含む。10YR3/3

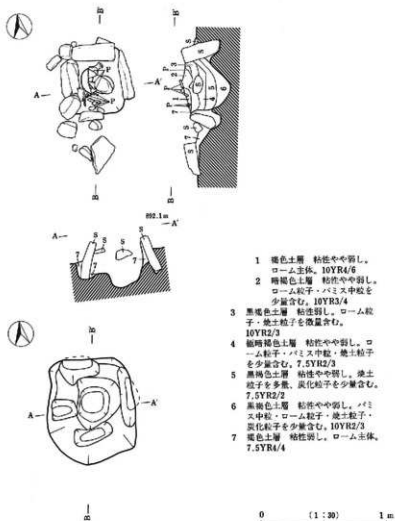
0 (1:80) 2m

第5図 第2号住居址実測図



第6図 第2号住居址出土石器実測図(1)

0 (1:6) 10cm



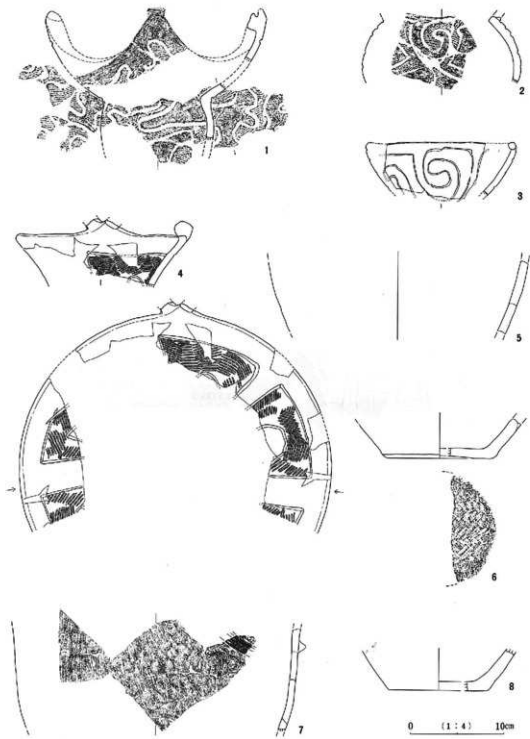
- 1 褐色土層 粘性やや弱し。
ローム主体。10YR4/6
- 2 暗褐色土層 粘性やや弱し。
ローム粒子・パミス中粒を
少量含む。10YR3/4
- 3 黒褐色土層 粘性弱し。ローム粒
子・焼土粒子を微量含む。
10YR2/3
- 4 暗褐色土層 粘性やや弱し。ロ
ーム粒子・パミス中粒・焼土粒
子を少量含む。7.5YR2/3
- 5 黒褐色土層 粘性やや弱し。焼土
粒子を多数、炭化粒子を少量含む。
7.5YR2/2
- 6 黒褐色土層 粘性やや弱し。パミ
ス中粒・ローム粒子・焼土粒子・
炭化粒子を少量含む。10YR2/3
- 7 褐色土層 粘性弱し。ローム主体。
7.5YR4/4

第7図 第2号住址炉実測図

×68cm・深さ23cmを測る。ピットは、P₂₂とP₂₈、張り出し部のP₂₃～P₂₇を除き、全て壁際に円形に配されていた。またその内側に扁平な安山岩が円形に配されていた。なおP₂₂は浅い掘り込みで、東側の一部で焼土が確認された。

炉は住居址のはほぼ中央で確認された。方形の石圍炉で、石は全て安山岩を使用している。規模は東西68cm・南北83cmを測る。4個の炉石は全て内傾していた。

本住居址からは縄文時代中期末葉から後期初頭の土器が出土しており、検出遺構中出土量は最も多いが、個体の残存率は低く器形の全容を窺えるものは無い。石器は、打製石斧・粗割石器・石鎌・石錐・横刃型石器・フレイク・スクレパー・ストーンリクッチャー・磨石・多目的石器・転用炉石等が出土し、49点を図示した。詳細は第4表・第3表を参照されたい。石質は玄武岩が



第8图 第2号住居址出土土器片断(图1)



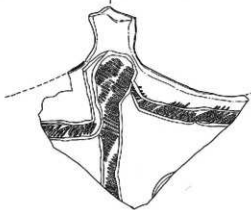
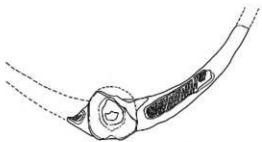
9



10



11



12



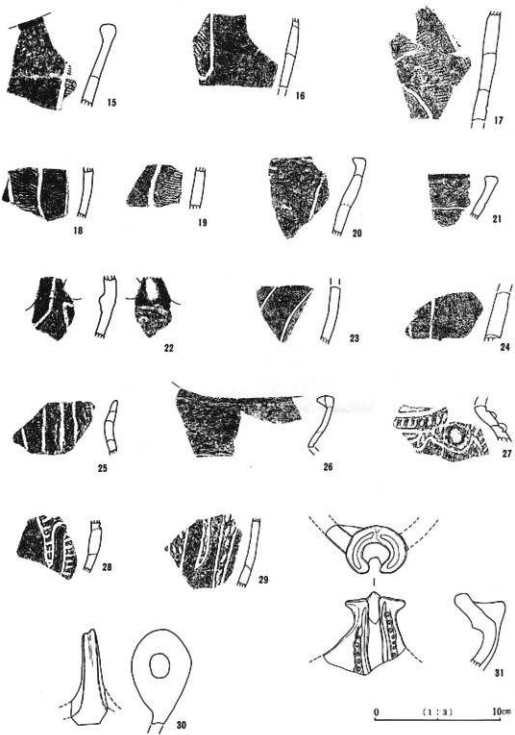
13



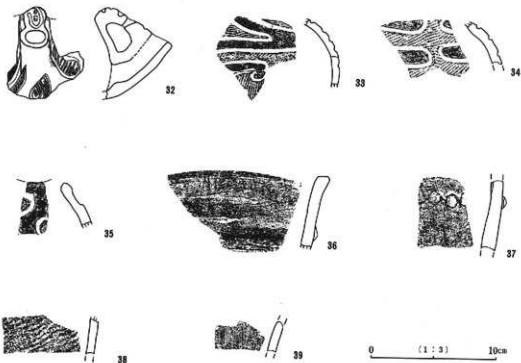
14

0 (1:3) 10cm

第9图 第2号住居址出土土器实例图(2)



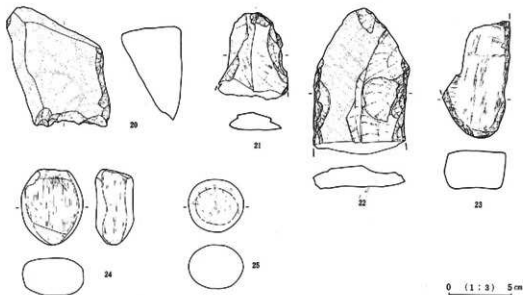
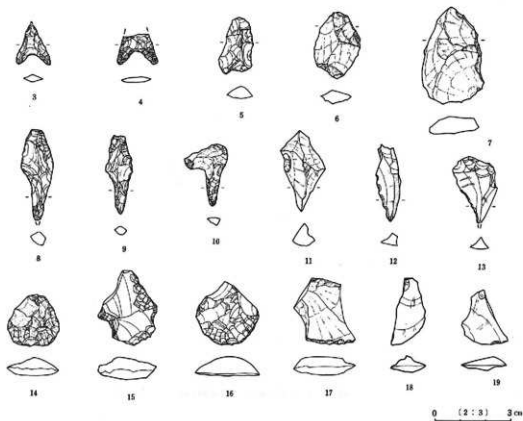
第10图 第2号住居址出土土器类图(3)



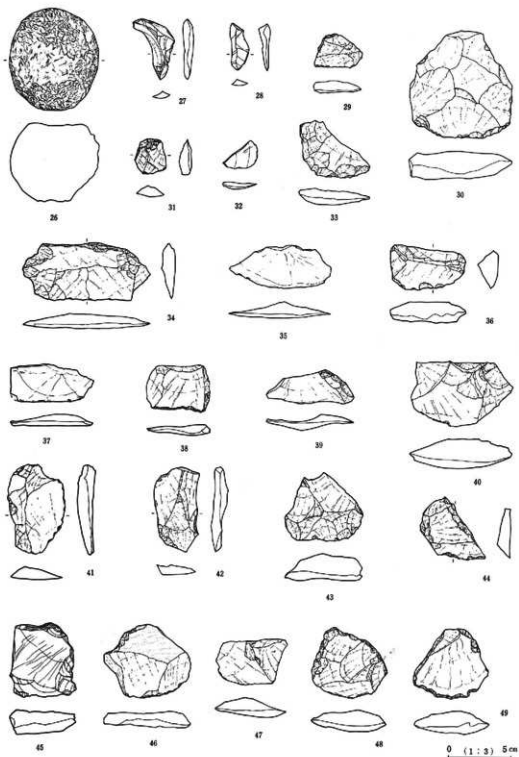
第11図 第2号住居址出土土器実測図(4)

最も多く、他にチャート、黒曜石、輝石安山岩を利用している。土器では、中期末葉（加曾利E IV式）の伝統を色濃く残すものは9-9のみであり、全体的な様相は称名寺色が強い。称名寺式土器は頸部の括れが強く、器形のプロポーション変換の著しいもの（8-1、10-26・27）が観られる。文様は縄文の施文される区画と施文されない区画が交互に展開する磨消縄文構成を採り、基本的な施文順序は沈線区画→縄文充填→器面調整の順であるが、縄文を充填後、再度沈線をなぞるケースがあり、結果的に縄文充填→沈線区画の順序で施文順序が看取されるものもある。縄文は単節LR然紐により施文されたものが圧倒的に多く、また刺突文が区画内を充填するものは少ない。器種には深鉢・注口がある。深鉢は大きな波状縁を呈し、波頂部には突起が貼付されている。注口は精緻なつくりを呈する。胎土には白色粒子が混入され、脆弱で色調は橙色（7.5Y R7/6）を呈し、軽質であるものが主体を占める。

以上より本住居址の所産期は、縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられる。



第12图 第2号住野址出土石器实例图(2)



第13图 第2号住居址出土石器类图(3)

第1表 第2号住居址出土土器一覧表(1)

標号番号	部 種	部 位	器 形・文 様・施文 海 序	時 期	備 考
8-1	深 鉢	口 縁 部 一 脚 部	鋭い稜部より口縁が大きく開くキャリバー状器形を呈す。滑漚 施文構成。L R 施文回転施文→曲線の文沈線区画→器面彫刻。 口縁部内側に内磨。	後 期 初 頭 新 名 寺 式	径0.5m内外の白色粒子を多 量に含む。
8-2	■	胴 部	滑漚施文構成。連続した「J」字「X」字状沈線区画→L 且 施 文光環→器面彫刻。	■	外面灰化物付着。
8-3	深 鉢?	口 縁 部	キャリバー状器形?。沈線により連続した「J」字状文が僅か れる。	■	外面灰化物多量に付着。
8-4	深 鉢	口 縁 部 一 脚 部	彫刻状器形。滑漚施文構成。ハベル状の沈線区画→L 且 施文光 環→器面彫刻。	■	外面黒色塗彩。輪轆なつくり を呈す。
8-5	■	胴 部	無文。外磨蝕ミガキ。内磨蝕ミガキ。	■	径1.0m内外の白色粒子を多 量に含む。内面灰化物付着。
8-6	■	底 部	模代痕を有す。	■	径1.0m内外の白色粒子を多 量に含む。
8-7	■	胴 部	断面三角形の陰帯を楕付。内外面ミガキが施される。	■	輪轆なつくりを呈す。
8-8	■	底 部	模代痕?を有す。	■	底面火熱を受けた痕跡有。 輪轆なつくりを呈す。
9-9	■	胴 部	隆起帯部により文様区画を構成。陰隆起帯楕付→L R 施文回転 施文による光環。	中期末葉～後期初頭	径0.5m内外の白色砂粒を 含む。
9-10	■	■	横いL 且 施文回転施文。	■	
9-11	■	■	滑漚施文構成。深面状沈線区画→L 且 施文回転施文による区 画内光環→器面彫刻。	■	径0.5m内外の白色粒子を少 量含む。
9-12	■	口 縁 部	筒状突起を有し、キャリバー状器形?を呈す。滑漚施文構成。 「J」字状?沈線区画→L 且 施文回転施文による区画 内光環→器面彫刻。	後 期 初 頭 新 名 寺 式	■
9-13	■	胴 部	隆起帯構成。「J」字状沈線区画→L R 施文回転施文による区 画内光環→器面彫刻。	■	9-12と同一個体の可能性有。
9-14	■	口 縁 部	凹状突起を有す。滑漚施文構成。沈線区画→L 且 施文回転施 文。	■	外面黒色塗彩?輪轆なつくり を呈す。
10-15	■	■	流注口縁を呈し、口縁部内側に肥厚する。滑漚施文構成。L R 施文回転施文→沈線区画。	■	外面灰化物付着。 砂粒を多量に含む。
10-16	■	胴 部	滑漚施文構成。模印状沈線区画→L 且 施文回転施文。	■	外面灰化物付着。 輪轆なつくりを呈す。
10-17	■	■	滑漚施文構成。沈線区画→L 且 施文回転施文。	■	砂粒を多量に含む。
10-18	■	■	滑漚施文構成。沈線区画→L 且 施文回転施文→器面彫刻。	■	
10-19	■	■	滑漚施文構成。沈線区画→L 且 施文回転施文。	■	
10-20	■	口 縁 部	口縁部内側に肥厚。楕円状沈線区画→器面彫刻。	■	外面灰化物付着。
10-21	■	■	口縁部内側に肥厚。沈線による文様区画を構成?。	■	外面黒色塗彩?。
10-22	■	尖 形	沈線による文様区画を構成?。尖形内側に沈線有す。	■	径0.5m内外の白色粒子を 含む。
10-23	■	胴 部	沈線による文様区画を構成。	■	
10-24	■	■	■	■	砂粒を多量に含む。
10-25	■	口 縁 部	口縁部外欠する。口縁部より4本の沈線が垂下する。	■	

第2表 第2号住居址出土土器一覧表(2)

押区番号	器種	部位	器形・文部・施文順序	時期	備考
10-26	深鉢	口縁部	口縁部内折。胴部に沈線が1条走る。	後期初段 推定 式	内外両面化粧付家。
10-27	■	胴部	ボタン状陥付文を有する。沈線+刺突文により区画文様を構成。沈線区画→刺突文突項。	■	同一個体。
10-28	■	■	■	■	
10-29	■	■	■	■	
10-30	■	把手	現状を呈し、丁寧なミダキが施される。	■	出土・調整8-4・7に類似。
10-31	■	突起	法蓮部より隆帯が低下し、隆帯上に何点刺突文・沈線文が突出される。	■	
10-32	注口	注口部	唐傳繩文構成。沈線区画→L及繩文構成。	■	赤色塗彩。精緻なつくりを呈す。
10-33	■	胴部	唐傳繩文構成。L及繩文区画→刺突文→沈線区画。	■	外面黒色塗彩。精緻なつくりを呈す。
10-34	■?	■	唐傳繩文構成。L $\left\{ \begin{array}{l} L \\ R \\ R \\ L \\ L \\ L \end{array} \right.$ 繩文単位区画→沈線区画。	■	精緻なつくりを呈す。
10-35	■	口縁部	局所的な沈線による文様区画を構成。	■	
10-36	深鉢	■	両面三角形の隆帯により、口縁部隆帯と胴部隆帯が分割される。胴部L及繩文区画施文。	■ ?	
10-37	■	胴部	微細凹点を有する隆帯呈出。	後期初段	径100内外の白色種子を含む。
10-38	■	■	L及繩文単位区画施文。	■ ?	砂粒を多量に含む。
10-39	■	■	条線文単位施文。	中期末葉~後期初段	

第3表 第2号住居址出土石器一覧表(1)

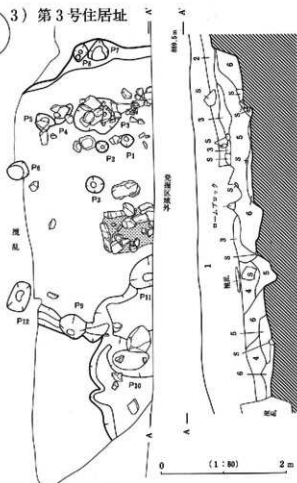
押区番号	器種	石質	法量 cm			備考
			長さ	巾	厚さ	
6-1	炉石	砂岩	26.6	11.9	6.9	石皿→多孔石→炉石へと転用
6-2	炉石	砂岩	16.7	12.7	10.8	砥石→多孔石→炉石へと転用
12-3	石鏝	チャート	(1.5)	1.3	0.3	凹蓋
12-4	石鏝	黒曜石	(1.2)	1.6	0.2	凹蓋
12-5	石鏝	黒曜石	2.2	1.35	0.6	未成品、調整段階段階、 ¹⁾
12-6	石鏝	玄武岩	2.6	1.8	0.6	未成品、整形段階
12-7	石鏝	玄武岩	3.9	2.5	0.9	未成品、整形段階
12-8	石鏝	チャート	(3.6)	1.3	0.7	
12-9	石鏝	チャート	3.1	1.1	0.9	
12-10	石鏝	玄武岩	2.4	1.75	0.7	
12-11	石鏝	玄武岩	3.2	1.8	1.2	

第4表 第2号住居址出土石器一覧表(2)

押 番 号	器 種	石 質	法 量 cm			備 考
			長 さ	巾	厚 さ	
12-12	石 鏃	チャート	3.1	1.0	0.6	
12-13	石 鏃	チャート	2.6	1.8	0.8	
12-14	スクレパー	玄武岩	2.0	2.0	0.7	金剛に刃部を形成
12-15	スクレパー	黒曜石	3.0	2.3	0.9	
12-16	スクレパー	黒曜石	2.4	2.5	0.7	
12-17	スクレパー	玄武岩	2.6	2.4	0.7	一辺に刃部を形成
12-18	フレイク	チャート	3.6	1.2	0.7	使用磨耗痕有
12-19	フレイク	チャート	2.2	1.8	0.55	使用磨耗痕有
12-20	粗割石器	安山岩	9.6	8.2	4.7	礫器
12-21	打製石斧	安山岩 <6.9>	5.5	1.5	1.6	刃部欠損
12-22	打製石斧	安山岩 <11.5>	7.8	1.6	1.6	刃部欠損
12-23	多目的石器	安山岩 <9.2>	5.3	3.1	3.1	砥石(四面)と敲石併用
12-24	磨 石	玄武岩	6.1	4.9	3.1	著しく磨耗し光沢を持つ
12-25	磨 石	安山岩	4.2	4.4	3.5	使用磨過痕有
13-26	ストンリタチャー	玄武岩	8.0	6.9	6.1	全面に鼠歯状痕有
13-27	スクレパー	チャート	4.9	1.9	0.85	全面に刃部を形成
13-28	スクレパー	チャート	3.7	1.4	0.9	二辺に刃部を形成
13-29	スクレパー	玄武岩	3.8	2.5	0.9	一辺に刃部を形成
13-30	打製石斧	玄武岩	8.4	8.4	2.2	
13-31	スクレパー	玄武岩	2.8	2.4	1.0	二辺に刃部を形成
13-32	フレイク	チャート	2.7	2.2	0.5	使用磨耗痕有
13-33	スクレパー	玄武岩	5.5	4.9	1.3	
13-34	横刃型石器	安山岩	10.2	4.6	1.2	
13-35	フレイク	玄武岩	8.1	3.4	1.25	横刃型、刃部に使用痕
13-36	スクレパー	玄武岩	6.0	3.5	2.7	二辺に刃部を形成、使用磨耗痕有
13-37	フレイク	玄武岩	6.5	3.0	0.9	横刃型、刃部に使用痕
13-38	スクレパー	玄武岩	5.0	3.7	0.9	一辺に刃部を形成
13-39	フレイク	安山岩	6.9	2.5	0.9	使用磨耗痕有
13-40	スクレパー	玄武岩	8.1	5.1	2.4	石核利用(コア・ツール)
13-41	横刃型石器	玄武岩	7.0	4.4	1.3	一辺に刃部を形成、使用磨耗痕有
13-42	スクレパー	玄武岩	6.7	3.3	1.1	二辺に刃部を形成、使用磨耗痕有
13-43	スクレパー	玄武岩	6.1	5.3	1.9	一辺に刃部を形成
13-44	スクレパー	玄武岩	5.9	3.1	1.2	一辺に刃部を形成
13-45	スクレパー	チャート	5.8	5.2	1.9	一辺に刃部を形成
13-46	スクレパー	安山岩	6.9	5.8	1.3	刃部に使用磨耗痕有
13-47	フレイク	玄武岩	5.6	3.6	1.4	使用磨耗痕有
13-48	スクレパー	チャート	5.9	5.5	1.7	一辺に刃部を形成
13-49	スクレパー	玄武岩	5.5	5.9	1.8	一辺に刃部を形成

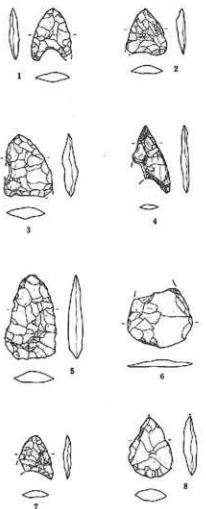


3) 第3号住居址



- 1 黒褐色土層 耕作土。10YR2/3
- 2 暗褐色土層 粘性やや弱し。スコリアを微量、ローム粒子を少量含む。10YR3/4
- 3 褐色土層 粘性弱し。ローム粒子を多量、スコリア・パリス小粒を微量含む。10YR4/4
- 4 暗褐色土層 粘性やや弱し。スコリア・パリス小粒を微量、ローム粒子を少量含む。10YR3/3
- 5 暗褐色土層 粘性やや強し。炭化粒子・スコリアを微量、ローム粒子を少量含む。10YR3/3
- 6 褐色土層 粘性弱し。ローム主体。10YR4/6

第14図 第3号住居址実測図

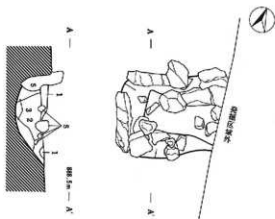


0 (2:3) 3cm

第15図 第3号住居址出土石器実測図

第3号住居址は、調査区の南側、あ・いー1～3グリッド内において検出され、南側と西側を視乱によって破壊される。

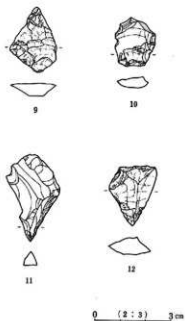
平面形態は円形を呈し、南側に張り出し部を持つと考えられる。現存する規模は南北470cm(張り出し部を含めて614cm)を測る。壁高は残存する北壁で29～49cm、南壁で4～8cmを測る。ピットは12個が検出された。P₁は径20×22cm・深さ14cm、P₂は径18×20cm・深さ12cm、P₃は径26×29cm・径17cm、P₄は径18×31cm・深さ10cm、P₅は径27cm・深さ29cm、P₆は径27×32cm・深



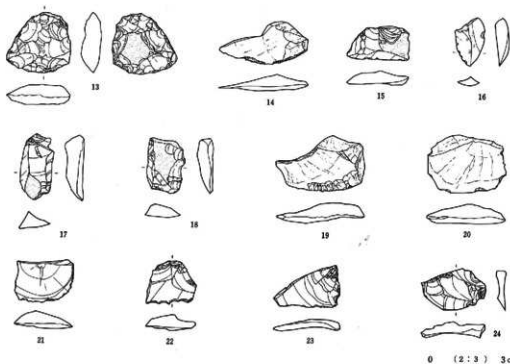
- 1 暗褐色土層 粘性やや弱し。ローム粒子・スコリア・炭化粒子を少量含む。10YR3/3
- 2 褐色土層 粘性やや弱し。ローム粒子・スコリアを少量含む。7.5YR4/4
- 3 褐色土層 粘性やや弱し。焼土主体。7.5YR4/6

0 (1:30) 1 m

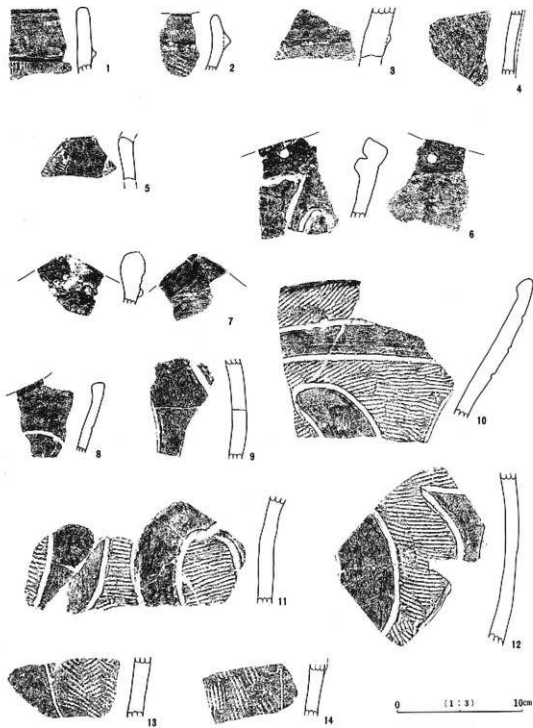
第16図 第3号住居址伊実測図



第17図 第3号住居址出土石器実測図(2)



第18図 第3号住居址出土石器実測図(3)



第19图 第3号住居出土土器実測图(1)



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



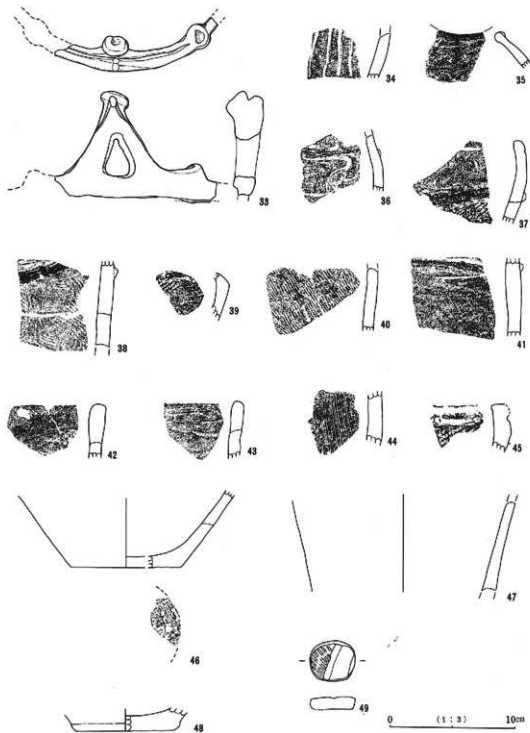
31



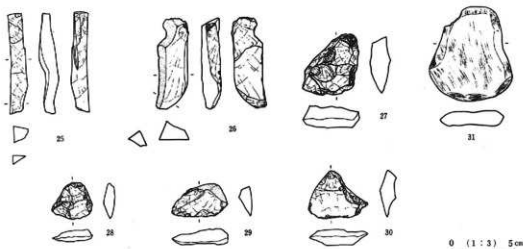
32

0 (1:3) 10cm

第20图 第3号住居址出土土器实例(附2)



第21图 第3号住居址出土土器实例(附3)



第22図 第3号住居址出土石器実測図(4)

さ54cm、 P_7 は径34cm・深さ39cm、 P_8 は径24×31cm・深さ43cm、 P_9 は径35×43cm・深さ31cm、 P_{10} は径61×72cm・深さ8cm、 P_{11} は径39×44cm・深さ32cm、 P_{12} は径30×49cm・深さ39cm、 P_{13} は径56×74cm・深さ53cmを測る。北壁際に安山岩が多量に散乱しており、第2号住居址の様な配石の存在も考えられる。

炉は住居址の中央よりやや南よりで検出された。方形の石囲炉で、炉石は全て安山岩を使用していた。規模は南北が66cm、東西が現長86cmを測る。なお南側の炉石は配石の位置を崩していた。

本住居址からは、縄文時代中期末葉から後期初頭の土器が出土している。出土量は第2号住居址に次いで多いが、全容の把握ができるものは無い。石器は、石鎌・石錐・スクレパー・フレイク・刃器状石器・楔形石器・砥石・石核等が出土し、31点を図示した。石質は玄武岩が最も多く、他にチャート・黒曜石・砂岩・安山岩が利用される。22-25・26は刃器状石器としたが、両者は製作方法も剥片も違うが、スクレパーと分けるため仮称で刃器状とした。また22-28は形状が楔形であるため楔形としたが、ヒエスエスキューや両極調整石器とは分けて考えた。なお本住居址からは打製石斧が破片も含めて出土していない。なお、詳細は第7表を参照されたい。土器の全体的な様相は後期初頭(称名寺式)色が強いが、第2号住居址に比べ中期末葉(加曾利EIV式)の出土量が多い。19-1-5・7は微隆帯により文様区画を構成する加曾利EIV式である。称名寺式土器は頸部の括れが弱いものが多く、強く括れるものは20-15のみである。文様は磨消縄文構成を採り、縄文の撻方向はLRが優勢である。また列点文の使用されたものは無い。器種には深鉢・甕・注口?がある。胎土には白色粒子が混入され、脆弱な傾向を示す。色調は橙色(7.5 YR 7/6)を呈し、非常に軽質なものが多い。

以上より本住居址の所産期は、縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられる。

第5表 第3号住居址出土土器一覧表(1)

採掘番号	器種	部位	器型・文様・施文順序	時期	備考
19-1	瓶	口縁部	縁隆起帯による文様区画を構成。上施文・下条線を施す施文。	中期末葉～後期初葉	径0.5cm内外の白色結子を含む。
19-2	■	■	縁隆起帯による文様区画を構成。上施文・下L.R編文縦位印施文。	■	
19-3	■	胴部	帯隆起帯による文様区画を構成。	■	径1cm内外の砂粒を多量に含む。
19-4	■	■	帯隆起帯による文様区画を構成。区画内L.R編文縦位印施文。	■	
19-5	■	■	磨消編文構成。R.L・L.R編文施文→磨消し。		径0.5cm内外の白色結子を少量含む。
19-6	■	■	波状線を施し、口縁部内側に厚。幅約5mmの波線による区画文を構成。口唇部・内面肥厚部に同一施文具による円形刺突文を施す。 内外面共に丁寧なミガキが施される。	■	
19-7	■	口縁部	波帯部。帯隆起帯による文様区画を構成。上径約5mmの円形刺突文・下L.R編文光輝。波帯部内面に突起有する。	■	径1cm内外の高橋土粒を含む。
19-8	■	■	波状口縁。口縁部内面に肥厚。波線による区画文を構成。	後期初葉	径1cm内外の白色結子を少量含む。
19-9	■	胴部	幅約6mmの波線による文様区画を構成。	■	同一個体。 径1cm内外の白色結子を含む。
19-10	■	口縁部	プロポジション変換の様いキャリナー状帯部。磨消編文構成。器底割製・L.R編文縦位印施文→沈積区画。	■	
19-11	■	胴部	■	■	
19-12	■	胴部	■	■	
19-13	■	■	磨消編文構成。L編文縦・縦位印施文による波状編文構成。	中期末葉～後期初葉	同一個体。 石灰粒を多量に含む。
19-14	■	■	■	■	
20-15	■	口縁部	口唇部内側に肥厚。磨消編文構成。R.L編文施文→重「コ」字状沈積区画。	後期初葉	外面炭化物付着。
20-16	■	■	口縁部内周し。板状の小突起を有す。突起より磨下する隆帯剥落。	後期初葉	径0.5cm内外の白色結子を含む。
20-17	■	■	口縁部内側に肥厚。後列字状の波線区画による磨消編文構成。L.R編文縦・縦位に施文。	後期初葉	外面黒色着色
20-18	■	■	磨消編文構成。L.R編文縦位施文。	■	
20-19	■	■	口縁部内面に肥厚。磨消編文構成。区画内R.L編文・両突文施文。編文施文→沈積区画→磨消調整。	■	輪縁をつくりを施す。
20-20	■	■	波状口縁。口縁部内面に肥厚。磨消編文構成。L編文施文→沈積区画。	■	
20-21	■	胴部	磨消編文構成+垂下隆帯輪付。隆帯貼付→新位割み。沈積区画→L.R編文光輝。局所的にL.R編文施文→沈積区画。	■	
20-22	■	胴部	波線による区画文+板状隆帯垂下。	■	径0.5cm内外の白色結子を含む。
20-23	■	■	磨消編文構成。R・R.L編文光輝→沈積区画。	■	外面炭化物付着。
20-24	■	■	磨消編文構成。L編文縦位印施文。	中期末葉～後期初葉	砂粒を多量に含む。
20-25	■	口縁部	磨消編文構成。L編文縦位印施文→沈積区画→器底割製。	後期初葉	輪縁をつくりを施す。
20-26	■	■	後列字状の波線区画による磨消編文構成。L編文縦・縦位印施文→沈積区画。	■	

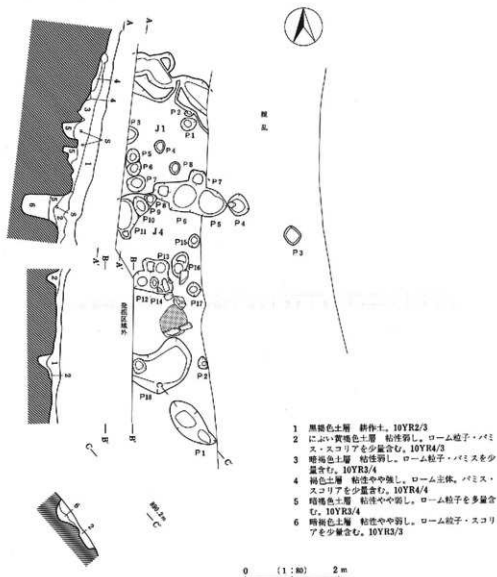
第6表 第3号住居址出土土器一覧表(2)

経路番号	器種	部位	器形・文様・施文順序	時期	備考
20-27	深鉢	胴部	唐沓織文模成、沈部区画→L.R織文縦位同和地文による区画内充満。	後期初頭 地名寺式	φ0.5mm内外の白色粒子を含む。
20-28	■	■	唐沓織文模成、L織文縦位同和地文→沈部区画。	中期末葉-後期初頭	φ砂粒を多量に含む。
20-29	■	■	唐沓織文模成、L.R織文施文・沈部区画→器蓋裏面。	後期初頭	器蓋破片を少量含む。
20-30	■	■	唐沓織文模成、L織文斜位同和地文。	■	φ0.5mm前後の白色粒子を多量に含む。
20-31	■	■	唐沓織文模成、沈部区画→L織文縦位同和地文による区画内充満。	■	外面炭化物付着。
20-32	■	底部裏上	唐沓織文模成、L.R織文縦位同和地文。	■	外面凹凸が顕著。
21-33	■	口縁部	三角形の突起把手を有する。口縁部には沈部文・刺交文が施される。	■	■
21-34	■	胴部	4条の沈部文並下。	■	■
21-35	注	口縁部	口縁部縁起成して肥厚。無文。内面炭灰状附着。	■	■
21-36	■	胴部	縁起部・沈部により区画を構成。	■	■
21-37	深鉢	口縁部	帯帯により口縁部無文帯と胴部文帯帯を区画。下L.R織文縦位施文。	後期初頭	砂粒を多量に含む。
21-38	■	胴部	縁起部帯により文帯区画を構成。下L織文縦位方向に同和地文。	■	■
21-39	■	口縁部	口縁部内側に内折。器蓋調整は粗雑。	■	砂粒を多量に含む。
21-40	■	胴部	L.R織文斜位同和地文。内面は丁寧なミダキが施される。	■	φ0.5mm内外の白色粒子を含む。
21-41	■	■	細い隆帯が横走する。	■	石灰状粒子を多量に含む。
21-42	■	口縁部	無文。	■	砂粒を多量に含む。
21-43	■	■	無文。	■	器蓋破片を含む。
21-44	■	胴部	縁起文並下。	■	砂粒を含む。
21-45	■	口縁部	刺交文+環状沈部・L.R織文縦位同和地文。	■	白色砂粒少量含む。
21-46	■	底部		■	■
21-47	■	胴部	外面ケズリ調整。	後期初頭	外面炭化物付着。φ0.5mm内外の白色粒子を含む。
21-48	■	底部	底面周りにミダキが施される。	■	砂粒を多量に含む。
21-49	土製円盤	■	外面は丁寧な磨削りが施される。	地名寺式以降	地名寺式土器群破片を使用。

第7表 第3号住居址出土石器一覧表

採 回 番 号	部 種	石 質	法 量 cm			備 考
			長 さ	巾	厚 さ	
15-1	石 鍬	玄武岩	2.0	1.6	0.35	凹基
15-2	石 鍬	玄武岩	2.4	1.9	0.5	平基
15-3	石 鍬	玄武岩	1.3	1.6	0.35	平基
15-4	石 鍬	黒曜石	2.7	(1.5)	0.3	凹基
15-5	石 鍬	玄武岩	3.3	2.0	0.6	凹基
15-6	石 鍬	玄武岩	<2.3>	2.6	0.3	凹基
15-7	石 鍬	玄武岩	<1.8>	(1.3)	0.3	凹基
15-8	石 鍬	玄武岩	<2.3>	(1.7)	0.55	凹基
17-9	石 鍬	玄武岩	2.5	1.8	0.5	未成品、剝離調整段階
17-10	石 鍬	黒曜石	1.9	1.6	0.5	未成品、剝離調整段階
17-11	石 鏃	チャート	3.4	2.15	1.1	
17-12	石 鏃	玄武岩	2.4	1.8	0.8	
18-13	スクレパー	チャート	2.5	2.35	0.8	全周に刃部を形成
18-14	フレイク	玄武岩	3.5	1.7	0.65	一辺に刃部を形成
18-15	スクレパー	黒曜石	2.4	1.35	0.5	二辺を刃部として使用、使用剝離痕有
18-16	フレイク	チャート	1.9	1.2	0.5	二辺を刃部として使用、使用剝離痕有
18-17	スクレパー	黒曜石	2.6	1.3	0.65	二辺に刃部を形成
18-18	スクレパー	黒曜石	2.2	1.5	0.65	三辺に刃部を形成
18-19	スクレパー	玄武岩	3.5	2.2	0.7	一辺に刃部を形成(両面剝離)
18-20	フレイク	玄武岩	3.1	2.3	0.75	一辺を刃部として使用
18-21	フレイク	チャート	2.3	1.6	0.7	一辺を刃部として使用、使用剝離痕有
18-22	スクレパー	チャート	2.0	1.7	0.6	一辺に刃部を形成
18-23	スクレパー	チャート	2.6	1.7	0.35	一辺に刃部を形成
18-24	スクレパー	チャート	2.55	1.7	0.45	一辺に刃部形成、使用剝離痕有
22-25	刃器状石器	玄武岩	7.9	1.3	1.35	一辺に刃部形成
22-26	刃器状石器	玄武岩	7.2	2.3	1.5	一辺に刃部形成、使用剝離痕有
22-27	楔形石器	玄武岩	4.8	4.4	1.7	
22-28	スクレパー	玄武岩	3.2	2.8	0.9	一辺に刃部形成
22-29	スクレパー	玄武岩	4.4	2.6	1.3	一辺に刃部形成
22-30	スクレパー	玄武岩	4.6	3.7	1.3	一辺に刃部形成
22-31	砥 石	砂 岩	7.5	6.5	1.3	全面使用

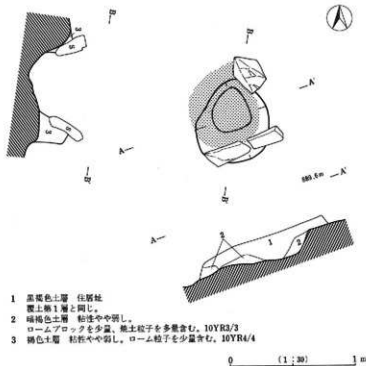
4) 第4号住居址



第23図 第1号・第4号住居址実測図

第4号住居址は、調査区のはほぼ中央、い・うー4・5グリッド内において検出され、東側を掘乱によって破壊される。

平面形態は、残存部分より円形を呈すると考えられる。壁高は残存する北壁で19~22cmを測る。ピットは18個が検出された。P₁は径56×120cm・深さ30cm、P₂は径21×26cm・深さ23cm、P₃は径36×41cm・深さ22cm、P₄は径37×46cm・深さ32cm、P₅は径57×65cm・深さ53cm、P₆は径56



- 1 黒褐色土層 住居址
裏土層1層と同じ。
- 2 暗褐色土層 粘性やや弱し。
ロームブロックを少量、粘土粒子を多量含む。10YR3/3
- 3 褐色土層 粘性やや弱し。ローム粒子を少量含む。10YR4/4

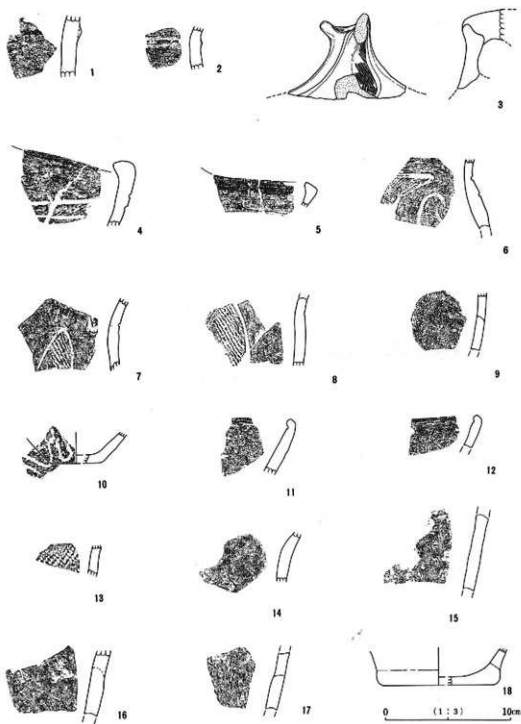
第24図 第4号住居址伊実測図

×72cm・深さ65cm、P₇は
径32×36cm・深さ9cm、
P₈は径36×46cm・深さ40
cm、P₉は径24×26cm・深
さ7cm、P₁₀は径30×41cm
・深さ18cm、P₁₁は径74cm
・深さ88cm、P₁₂は径36×
40cm・深さ45cm、P₁₃は径
40×55cm・深さ29.5cm、
P₁₄は径18×26cm・深さ
29.5cm、P₁₅は径24×28cm
・深さ13.5cm、P₁₆は径34
×57cm・深さ21.5cm、P₁₇
は径27×29cm・深さ15.5cm、
P₁₈は径85×132cm・深さ
31cmを測る。炉は住居址の
ほぼ中央で検出された。残

存する炉石は3個だけだが、方形か円形の石囲炉と考えられる。残存状態は悪く、耕作土が炉床まで侵入している部分もあった。

本住居址からは縄文時代中期末葉から後期初頭の土器が出土している。出土量は少なく、全容の窺えるものは皆無であり、全てが細片である。石器は、石鏃・石錐・打製石斧・スクレパー・フレイク・敲石・ストーンリクチャー・砥石・多目的石器・石核等が出土し、33点を図示した。なお、詳細は第9～11表を参照されたい。土器は称名寺式土器(25-3～10)を主体とするが、微隆起帯により文様区画を構成する加曾利EIV式(25-1・2)・口縁部内側に沈線を巡らせた堀之内式(25-11・12)も出土しており、新旧の両要素が混在する。称名寺式土器は唐清縄文構成を採り、充填された縄文の縄の燃り方向はLRが優勢である。25-3は深鉢土器の波頂部破片であり、橋状の把手が貼付されていたものと推察される。出土土器の色調はによい黄橙色を呈し、焼成はやや脆弱である。胎土には白色粒子の混入される傾向がある。

以上より本住居址の所産期は、縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられる。



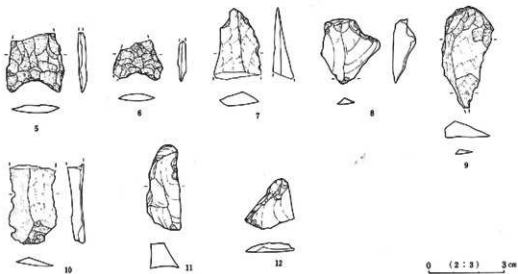
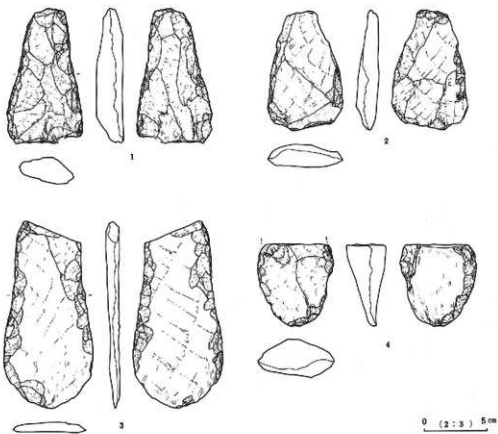
第25图 第4号住居址出土土器实例图

第8表 第4号住居址出土土器一覧表

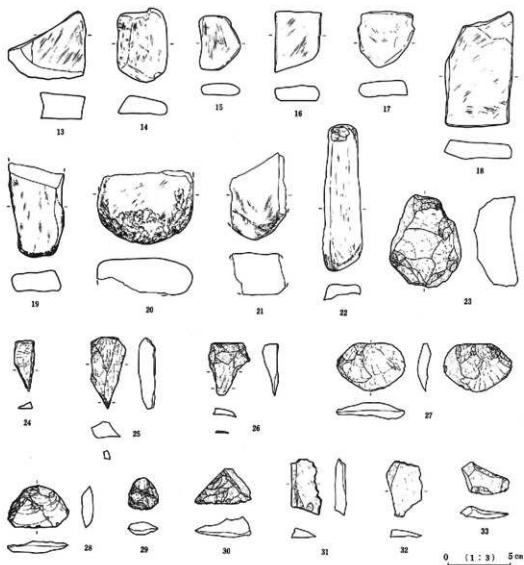
検出番号	器種部位	器形・文様・造文順序	時期	備考
25-1	祭鉢胴部	微隆腹帯による文様区画を構成。	中期末葉～後期初葉	白色粒子を多量に含む。
25-2	〃	〃	〃	〃
25-3	〃	横状?肥字を有する。唇沿縄文構成。沈線区画→L.R縄文縦位回転施文による区画内光景→器面調整。	後期初葉 私名寺式	横線なつくりを呈する。
25-4	〃	口縁部内面に肥厚。横沿縄文構成。L.R縄文縦位回転施文。	〃	内外異質化物付着。φ5mm内外の白色粒子を多量に含む。
25-5	〃	腹状口縁。口縁部内面に肥厚。	〃	横線なつくりを呈する。
25-6	祭鉢胴部	唇沿縄文構成。沈線区画→L.R縄文区画内光景→器面調整。	〃	φ0.5mm内外の白色粒子を含む。
25-7	〃	唇沿縄文構成。沈線区画→L.R縄文縦位回転施文による区画内光景→器面調整。	中期末葉～後期初葉	
25-8	〃	唇沿縄文構成。L.R縄文縦位回転施文→沈線区画→ミオキ。	〃	
25-9	〃	斜位の沈線文が1条を呈する。	後期初葉	
25-10	〃	「日」字状沈線による区画文様を構成。	私名寺式	φ0.5mm内外の白色粒子を多量に含む。外面黒色塗布。
25-11	〃	口縁部内面に肥厚し、沈線が1条出る。	後期初葉 堀之内式?	砂粒を含む。
25-12	〃	〃	〃	〃
25-13	〃	L.R縄文縦位回転施文。	後期初葉	
25-14	〃	素文。	〃	外面黒色塗布。石英状粒子を多量に含む。
25-15	〃	〃	〃	砂粒を多量に含む。
25-16	〃	〃	〃	φ0.5mm内外の白色粒子を含む。
25-17	〃	〃	〃	φ1mm内外の白色粒子を多量に含む。
25-18	〃	〃	〃	細砂粒を多量に含む。

第9表 第4号住居址出土石器一覧表(1)

検出番号	器種	石質	法量 cm			備考
			長さ	巾	厚さ	
26-1	打製石斧	玄武岩	10.7	6.0	2.2	
26-2	打製石斧	玄武岩	9.5	6.0	1.8	
26-3	打製石斧	安山岩	14.8	7.1	1.1	
26-4	打製石斧	玄武岩	6.4	6.1	3.1	
26-5	石錘	玄武岩	<2.3>	2.3	0.4	凹基
26-6	石錘	玄武岩	<1.6>	<2.0>	<0.3>	凹基
26-7	石錘	玄武岩	2.8	1.8	0.8	未成品、制離調整段階
26-8	石錘	黒曜石	2.6	2.4	0.9	スクレパーの可能性有
26-9	石錘	玄武岩	<4.0>	2.0	0.7	
26-10	フレイク	玄武岩	3.2	1.9	0.6	一辺を刃部として使用
26-11	スクレパー	黒曜岩	3.4	1.3	1.0	二辺に刃部を形成
26-12	フレイク	黒曜岩	2.0	2.0	0.3	一辺を刃部として使用、使用制離域有
27-13	砥石	安山岩	5.4	6.1	2.1	二面使用



第26图 第4号住居址出土石器实测图(1)



第27图 第4号住居址出土石器实测图(2)

第10表 第4号住居址出土石器一览表(2)

标本号	器种	石质	法 量 cm			备 考
			長さ	巾	厚さ	
27-14	砥石	安山岩	5.8	4.0	1.7	二面使用
27-15	砥石	安山岩	4.3	3.3	0.9	二面使用
27-16	砥石	砂石	4.9	3.7	1.2	二面使用
27-17	砥石	砂質凝灰石	4.5	4.4	1.6	二面使用
27-18	砥石	安山岩	9.2	5.4	1.6	二面使用
27-19	多目的石器	安山岩	7.5	4.4	1.7	砥石(二面使用)、敲石

第11表 第4号住居址出土石器一覧表(3)

持 図 番 号	器 種	石 質	法 量 cm			備 考
			長 さ	巾	厚 さ	
27-20	ストーンリッター	安山岩	<5.9>	7.5	2.4	鼠歯状痕有
27-21	敲石	安山岩	<7.0>	<4.5>	<3.3>	敲打痕有
27-22	多目的石器	安山岩	11.7	3.2	<1.3>	砥石・敲石
27-23	敲石	玄武岩	7.3	5.6	3.5	石核利用
27-24	石 錘	玄武岩	<3.8>	1.6	0.9	
27-25	石 錘	玄武岩	5.7	2.8	1.8	一辺を削器として使用
27-26	スクレパー	玄武岩	4.2	3.3	1.3	二辺に刃部を形成
27-27	スクレパー	玄武岩	5.4	3.8	1.3	使用刻離痕有
27-28	スクレパー	チャート	4.8	3.3	1.0	使用磨耗痕・刻離痕有
27-29	スクレパー	玄武岩	4.5	2.3	1.0	使用磨耗痕有
27-30	スクレパー	玄武岩	4.45	2.8	1.5	一辺に刃部を形成
27-31	フレイク	玄武岩	4.4	2.3	0.9	一辺を刃部として使用
27-32	フレイク	玄武岩	4.4	2.6	0.7	一辺を刃部として使用
27-33	スクレパー	玄武岩	3.4	2.5	0.8	一辺に刃部を形成

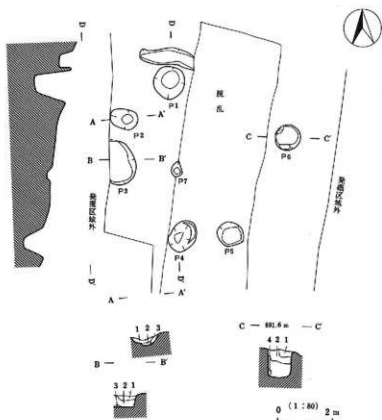
5) 第5号住居址

第5号住居址は、調査区北側、あ・い-6・7グリッド内において検出され、中央部を攪乱により破壊される。

平面形態はピットの在り方から円形を呈すると推考される。ピットは7個が検出された。P₁は径65×70cm・深さ82cm、P₂は径42×60cm・深さ26cm、P₃は径95cm・深さ48cm、P₄は径54×70cm・深さ41cm、P₅は径50×60cm・深さ27cm、P₆は径54cm・深さ63cmを測る。なお炉は検出されなかった。

本住居址からは縄文時代中期末葉から後期初頭の土器が出土している。出土量は少なく全てが細片である。石器はフレイク数点のみで図示は控えた。土器は称名寺式土器(29-2-4、7・8)を主体とし、器種には深鉢(1-4・7・9・10・11)・注口(29-8)が認められる。胎土には白色粒が混入され脆弱である。色調は橙色(7.5YR 7/6)を呈し、軽質であるものが主体を占める。

以上より本住居址の所産期は、縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられる。

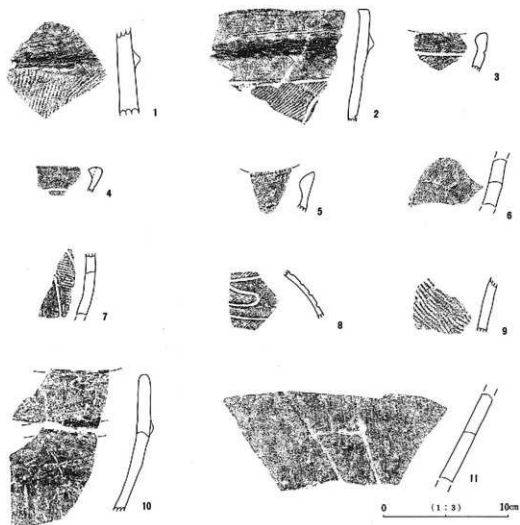


- P2セクション**
- 1 黒褐色土層 粘性やや弱し、ローム粒子・焼土粒子を微量、パミス中粒を少量含む、7.5YR3/2
 - 2 黄褐色土層 粘性弱し、ローム主体、炭化粒子・パミス中粒を少量含む、10YR5/6
 - 3 褐色土層 粘性弱し、ローム粒子・パミス中粒を少量含む、10YR4/6
- P3セクション**
- 1 褐色土層 粘性やや弱し、ローム粒子・パミス中粒を少量含む、10YR4/4
 - 2 褐色土層 粘性やや弱し、ローム主体、パミス中粒を少量、炭化粒子を微量含む、7.5YR4/4
 - 3 黒褐色土層 粘性やや弱し、ローム粒子を微量含む、10YR3/2
- P6セクション**
- 1 褐色土層 粘性弱し、ローム主体、パミス極小粒・スコリア・焼土粒子・炭化粒子を微量含む、7.5YR4/4
 - 2 暗褐色土層 粘性弱し、パミス極小粒・スコリア・ローム粒子を微量含む、7.5YR3/3
 - 3 暗褐色土層 粘性やや弱し、パミス極小粒・スコリア・ローム粒子を微量含む、7.5YR2/3
 - 4 明褐色土層 粘性弱し、ローム主体、パミス極小粒・スコリアを微量含む、7.5YR5/6

第28図 第5号住居址実測図

第12表 第5号住居址出土土器一覧表(1)

検出番号	器種	部位	器形・文様・銘文順序	時期	備考
29-1	須弥	胴部	前面三角形の隆起帯により文様帯を区画。上加文、下L縄文柄 位置無銘文。	中期末葉～後期初葉	が1mm内外の白色粒子を含む。
29-2	■	口縁部	口縁部直下に前面三角形の隆起帯を巡らし、層状縄文構造をとる。沈没区画→L状縄文構造位置無銘文による区画内充填→器面調製。	後期初葉 銘者寺式	
29-3	■	■	口縁部内側に肥厚。層状縄文構造。R.L?縄文構造→沈没区画。	■	砂粒を多量に含む。



第29図 第5号住居址出土土器実測図

第13表 第5号住居址出土土器一覧表(2)

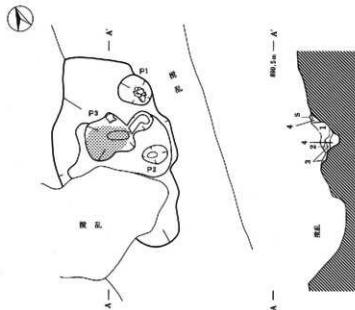
器趾番号	器 種	部 位	器 形・文 様・施文順序	時 期	備 考
29-4	深 鉢	口 縁 部	口縁部内側肥厚。磨治縄文構成。R L縄文横位回転施文。	後 別 初 須 群 / 名 寺 式	粘板なつくりを呈する。
29-5	?	?	流紋口縁。口縁部内側に肥厚。無文。	?	外面褐色塗布。
29-6	深 鉢	胴 部	無文。	?	φ1cm内外の白色粒子を多量に含む。
29-7	?	?	磨治縄文構成。L縄文斜位回転施文。	?	
29-8	注 口	?	磨治縄文構成。R L縄文横位回転施文→流紋区画。	?	外面褐色塗布。
29-9	深 鉢	?	L R縄文横位回転施文。	?	砂粒を多量に含む。

第14表 第5号住居址出土土器一覧表(3)

検出番号	器種	部位	器影・文様・施文順序	時期	備考
29-10	黒漆	口縁部	断面「カマボコ」状を呈する磨面が観察する。	後期相模	外面炭化物が多量に付着。 p2以内の白色粒子を多量に含む
29-11	×	胴部	無文。	「	p0.5以内の白色粒子を含む。

2 土坑

1) 第1号土坑



- 1 黒褐色土層 粘性やや強し。焼土粒子・炭化粒子を微量含む。
5.YR2/1
- 2 暗赤褐色土層 粘性強し。焼土主体。2.5YR3/6
- 3 黒褐色土層 粘性やや強し。ローム粒子・焼土粒子を微量含む。
7.5YR3/2
- 4 暗褐色土層 粘性やや弱し。ローム粒子を少量含む。
7.5YR3/4

第30図 第1号土坑実測図

第1号土坑は、調査区中央、い-5グリッド内において検出され、南西部を擾乱により破壊される。

平面形態は、南北320cm（現存値）・東西193cmを測り、南北に長い不整楕円形を呈する。ピットは3個が検出された。P₁は径46×54cm・深さ25.5cm、P₂は径29×40cm・深さ18cm、P₃は径68×72cm・深さ41cmを測る。なお、P₃は焼土が確認された。

本土坑は、P₃を炉として考えた場合、炉を伴う土坑として性格を与える事ができる。また全体

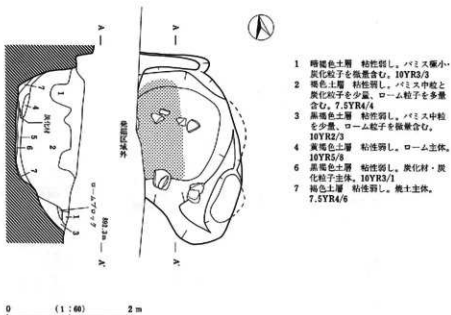
の規模を考えると、本土坑全体をもって屋外炉という可能性もある。何れにしても焼土を伴う特殊な土坑と考えられ、炉としても他の目的であったとしても非常に興味深い。今後の類別と研究を待ちたい。

本土坑からは、縄文時代後期初頭の土器と、安山岩製の打製石斧(34-1)・玄武岩のフレイ

クが出土している。土器(32-1~4、6)は全て称名寺式土器の深鉢の破片と考えられる。また、32-3は口縁部の破片で、他は全て胴部の破片である。

以上より本土坑の所産期は、縄文時代後期初頭に位置づけられるが、周囲の状況より、第2号から第5号住居址と併行関係にあると考えられる。

2) 第2号土坑



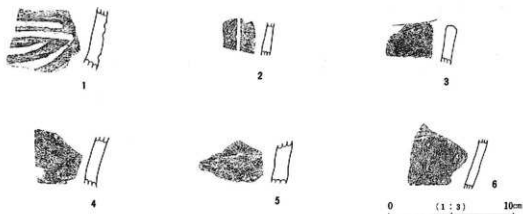
- 1 暗褐色土層 粘性弱し、パミス細小炭化粒子を微量含む。10YR3/3
- 2 褐色土層 粘性弱し、パミス中粒と炭化粒子を少量、ローム粒子を多量含む。7.5YR4/4
- 3 黒褐色土層 粘性弱し、パミス中粒を少量、ローム粒子を微量含む。10YR2/3
- 4 黄褐色土層 粘性弱し、ローム主体。10YR5/8
- 6 黒褐色土層 粘性弱し、炭化材・炭化粒子主体。10YR3/1
- 7 褐色土層 粘性弱し、焼土主体。7.5YR4/6

第31図 第2号土坑実測図

第2号土坑は、調査区北側、い-7・8グリッド内において検出された。

平面形態は、突出部を持つ隅丸方形を呈すると考えられる。規模は南北で240cm(突出部を含めて312cm)を測る。底面近くの第6層は炭化材と炭化粒子が主体の層で、壁際には第7層の焼土が確認された。また覆土中からは現代の遺物が出土している事より、近現代の炭焼窯と認識した。また混入遺物として縄文時代後期初頭の称名寺式土器深鉢胴部片(32-5)と、チャート製のスクレパー(34-2)が出土している。

以上より本土坑の所産期は、近現代と考えられる。



第32図 土坑出土土器

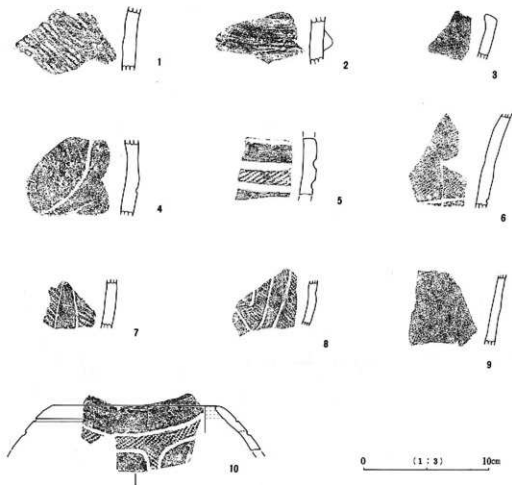
第15表 土坑出土土器一覧表

標記番号	器 種	部 位	器 形・文 様・施 文 順 序	時 期	備 考
32-1	深 鉢	胴 部	頸状に太い波線文を施す。	後 期 初 頭 形 名 守 式	砂粒を多量に含む。 D 1
32-2	※	※	磨光瓦文模成。且し縄文副位即ち縄文→波線区画。四形斜交文配列。	※	縞線交つくりを呈する。 D 1
32-3	※	口 縁 部	無文。	※	φ1mm内の白色粒子を多量に含む。D 1
32-4	※	胴 部	※	※	砂粒を多量に含む。 D 1
32-5	※	※	※	※	※
32-6	※	※	※	※	石英状粒子少量含む。 D 1

3 遺構外及びトレンチ

トレンチは遺構の確認を行うために合計9本を掘り下げた。この内遺構を検出したトレンチは1・2・5・7号トレンチである。なお8・9号トレンチから遺物は出土したが遺構は確認されなかった。

遺構外及びトレンチからは縄文時代中期末葉(33-1・2)から後期初頭(33-3~10)の土器が出土している。全て細片であり、出土量は少量である。33-10は外面及び口縁部内側に赤色塗彩の施された土器である。石器は、打製石斧・石錐・スクレパー・多孔石・フレイクが出土し、5点を図示した。



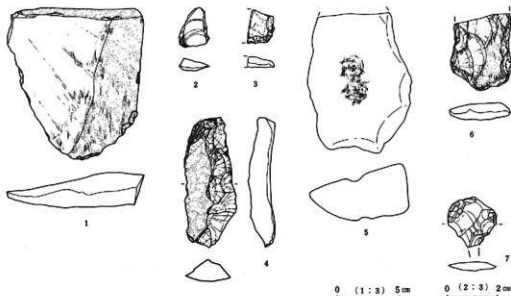
第33図 遺構外及びトレンチ出土土器実測図

第16表 遺構外及びトレンチ出土土器一覧表(1)

検出番号	器種	部位	器形・文様・胎文・胎文順序	時期	備考
33-1	鉢	鉢底	粗いL.R織文横位回転胎文。	中期末葉～後期初頃	砂粒を多量に含む。 第2号トレンチ
33-2	?	?	太い胎帯を横位に粘付。	?	φ1mm内外の白色粒子を含む。 第9号トレンチ
33-3	?	口縁部	口縁部内縁、胎文。	後期初頃	?
33-4	?	胎底	瓢状に沈積を繰り返す。	後期初頃 胎名寺式	φ1mm内外の白色粒子を多量に含む。 胎名寺式。
33-5	?	?	胎内胎文織成。沈積区画→L.R織文横位回転胎文による区画内胎文。	?	石灰状微粒子を多量に含む。 第9号トレンチ
33-6	?	?	胎内胎文織成?。L.R織文横位回転胎文帯+沈積区画により文様を構成。	?	φ1mm内外の白色粒子を含む。 胎名寺式。
33-7	?	?	胎内胎文織成。沈積区画→L.R織文横位回転胎文による区画内胎文。	中期末葉～後期初頃	石灰状微粒子を含む。 第9号トレンチ
33-8	?	?	胎内胎文織成。「V」字状沈積区画→L.R織文横・横位胎文による区画内胎文→胎名寺式。	後期初頃 胎名寺式	φ0.5mm内外の白色粒子を含む。 胎名寺式。

第17表 遺構外及びトレンチ出土土器一覧表(2)

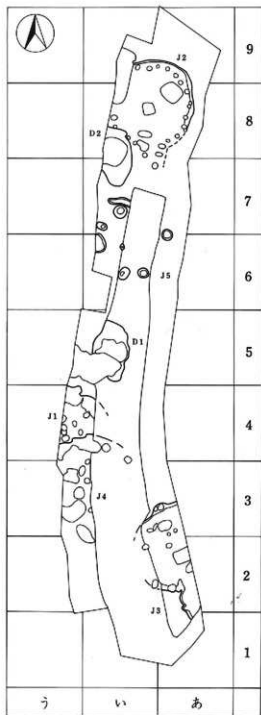
拝図番号	器種	部位	器形・文様・施文順序	時期	備考
35-9	深鉢	胴部	無文。	後期初頭	石英状粒子を多量に含む。 第9号トレンチ。
35-10	浅鉢	口縁部	帯流線文様成。沈没区画→L.R.流線文・横位同輪施文による区 画内光順→部面調整。	新名器式	外面から口縁部内面まで赤色 塗彩。砂粒を多量に含む。



第34図 土坑・遺構外及びトレンチ出土石器実測図

第18表 土坑・遺構外及びトレンチ出土石器一覧表

拝図 番号	器種	石質	法量 cm			出土 地点	備考
			長さ	巾	厚さ		
34-1	打製石斧	安山岩	12.0	10.8	<2.7>	D1	粗製、使用擦過痕有
34-2	スクレパ	チャート	3.1	2.4	1.0	D2	一辺に刃部形成
34-3	スクレパ	玄武岩	<2.3>	<2.6>	<0.9>	9トレ	一辺に刃部形成
34-4	スクレパ	玄武岩	10.3	4.1	1.9	9トレ	二辺に刃部形成
34-5	多孔石	安山岩	11.1	7.8	4.0	2トレ	凹4個
34-6	打製石斧	安山岩	<6.0>	4.9	1.5	2トレ	使用擦過痕有
34-7	石錐	黒曜石	<2.0>	1.9	0.4	表採	



第35図 鶴子木道跡全体図 (1:200)

第IV章 総括

鶴ヲネ遺跡は、縄文時代中期から後期にかけての集落址である。今回の調査は、台地（尾根）の中央を走る道路の拡巾工事に伴うもので、調査区は巾1.5m～2mで南北に細長く、全て人力による調査であった。また、念のため一部アスファルトと敷砂利を剥いだ結果、遺構が現道の下に残っている事が確認され、現道を全面剥ぎ取った。

調査の結果、縄文時代中期末頃の竪穴住居址1軒（J1号）、同じく中期末から後期初頭にかけての敷石住居址1軒（J2号）・竪穴住居址3軒（J3～5号）、縄文時代後期初頭の特異土坑1基（D1号）、近現代の炭焼窯1基が検出された。

J2号からJ5号住居址は、加曾利EIV式から称名寺式にかけての遺構で、称名寺式の深鉢・注口土器を中心に出土している。土器様相から、後期の初頭に所産期の中心を持って行けそうである。このJ2号からJ5号までの4軒とD1は併行関係にあり、同一期の集落の一部と考えられる。この後期初頭の集落は、本調査区の東西にまだ広がっていると考えられる。また中期の集落は本調査区より西側に展開すると予想される。

鶴ヲネ遺跡より出土した石器（コア・フレイク・チップを含む）の84パーセントは玄武岩で、次いで安山岩、チャート、黒曜石の順である。この玄武岩は、本遺跡南側を流れる香坂川の河床や河原、東側の果境付近の谷沿いに転石として多量に存在する。また細かく踏査すれば露頭も数多く発見できるだろうと考えられる。安山岩は、平尾山・閻伽流山・森泉山系産の輝石安山岩である。本遺跡出土の輝石安山岩は、風化状態で灰色、断面が黒灰色の良質のものである。なお、J2号住居址の配石に利用された輝石安山岩は、同山系産だが悪質で断面も灰色である。また同山系産の安山岩と考えられるが、輝石を肉眼で観察できないものがある。風化状態で灰色か灰褐色、断面が黒灰色で、前述の輝石安山岩よりは鋭い割れ口を示し、八風山系玄武岩に近い安山岩が数点確認された。この安山岩は他と区別するために、ここでは玄武岩質安山岩と仮称したい。また八風山系産玄武岩は以下玄武岩と呼ばせていただく。

玄武岩は、手で持つスクレパーと指で持つスクレパーを中心に、打製石斧・石鏃・石錐に利用される。輝石安山岩は、主に打製石斧に、希ではあるが手で持つスクレパーに利用される。玄武岩質安山岩は出土量が少なく明確に言えないが、打製石斧と手で持つスクレパーに利用されると考えられる。チャートと黒曜石は、石鏃と石錐・指で持つスクレパーが主で、希に手で持つスクレパーに利用される。玄武岩はほとんどの種類の石器に利用され、三つの種類の石が共存する石鏃と石錐に至っても、その中心となっている。原産地が近いとはいえ、いかに万能であったかが

窺えよう。

次に、玄武岩・輝石安山岩・玄武岩質安山岩を原材とした石器について若干の考察を行いたい。

打製石斧に利用される輝石安山岩は、扁平柱状で産するものが普通で、両面或いは片面に原石面を残すものが多い。また玄武岩・玄武岩質安山岩は、円礫・角礫で産するものが主で、原石より打ち出された大形剥片と、剥片を打ち出した後の芯を使うものが多い。この製作方法の違いは、原材の固さの差であろうが、製作の容易さという点で輝石安山岩製の打製石斧が多いと考えられる。形態では、撥形・短冊形・分銅形という分類を今回はあてはらずし、刃部のみで分けた。それによると、輝石安山岩では円刃を、玄武岩・玄武岩質安山岩では直刃を呈する場合が多い。これは単純に石材の性質による刃部形態の差とも考えられるが、石材の性質による使用目的の差とも考えられよう。その差は製品の欠損状態にも現れている。輝石安山岩製の多くのものが製品中央で切損しているのに対し、玄武岩・玄武岩質安山岩は刃部を中心に細かく欠損している。もちろんこれは石材の強度による差かもしれないが、同様に使用目的の差と考えられないわけでもない。次に使用目的だが、いくつか推測できる。「土を掘る」（遺構を掘る、植物の根を採集する等）、「木を伐採する」、「木を切断する」といった目的である。今回の調査や周辺部の調査でも磨製石斧が出土していない。そのため、玄武岩・玄武岩質安山岩製直刃のものが木の切断・伐採、輝石安山岩製円刃のものが土を掘るのに適していたらと推測もできる。しかし、前述した三つの目的において使用された万能な大道具であると留めておいた方が現時点ではいいのかもしれない。

スクレパーは多種多様で、定形化している横刃型石器や石匙以外、性格を与えるのは困難であるが、玄武岩との関係は避けられぬものがある。今回は取えて考察を試みたい。

横刃型石器については次の様に認識した。主として横長剥片・翼状剥片を利用し、長辺の一辺に直刃を、反対の辺に背を持つもので、刃部角度が鋭角なものである。植物採集が主たる目的で、直刃という事より、木材加工も考えられる。また石匙は様々な形態を呈するが、原則として摘み状の突出部を持つ。使用目的は私論を試みた。なぜ突出部があるのか、言い代えれば、なぜ突出部が必要なのか問題になろう。それは携帯用だったからと考えられる。つまり、突出部に紐を絡める事により携帯し易くしたのではないだろうか。後述するが、入念に剝離調整を行ったスクレパーがある。これに突出部を付ければ石匙になり得る。このスクレパーに対し、石匙には携帯用の万能利器としての性格が与えられるように思う。そう考えると、石匙の形態の違いもスムーズに納得できそうである。なお、広義で、横刃型石器は手に持つスクレパー、石匙（大型粗製石匙のみ手に持つスクレパー）は指に持つスクレパーとして扱いたい。

さてスクレパーであるが、「切る」、「断つ」、「削る」、「刻む」といった目的で使われた石器である事は言うまでもない。いくつかの分類方法があるが今回は、手で使用（手の平で支持）と指

で使用（指の腹で支持）と大きさから二つに大別した。さらに剥片（フレイク）そのものと刃部等に簡単な加工を行ったもの、入念に剥離調整を行ったものに細分される。その内前二者が圧倒的に数量が多く量産されている。その量産は主として玄武岩に限られている。さらにその量産の理由として、使用頻度が高く、刃部がすぐに使用不能になったという事があげられる。刃部が大きく影響する作業は、やはり「削る」で、次いで「切る」、「刻む」、「断つ」であろう。植物採集に使用されたものもあるかもしれないし、肉や皮を切断したものもあるかもしれない。しかし、万能利器であるがために量産されたのではなく、木材加工具であったからこそ刃部がすぐに使用不能となったろうし、量も多かったのだらうと考えられる。森林と共存していた彼らにとって木材利用は当然であり、我々が考えるよりも多くの木製品が使われていたかもしれない。さて次の問題だが、果たして玄武岩は木材加工具に適しているだろうか。それは必然的に適していたと言わざるを得ない。刃部を含めた全体の強度（木材加工を前提として）は、輝石安山岩・チャート・黒曜石よりは上だと思われる—もっとも同程度の大きさのものを比較した場合、質量が石によって違うのであるから強度を比べる事に関して問題は多い—さらに原材産地が近いという点で、玄武岩製のフレイクと簡単な加工を施したスクレパーは、木材加工具としての性格が強いと考えられる。次に入念な剥離調整を行ったものである。これは玄武岩も多い事は多いが、前述して来たものに比べ、チャートや黒曜石が増加する。形態は円形或いは楕円形を呈するものが多く、全周に刃部を持つものも少なくない。刃部は比較的鈍角で欠損も少なく、数量等踏まえた上で、肉や皮の切断・植物採集といった比較的柔らかい物に対して使用されたと思われる。なお最初に大別した指と手の違いは、行為対象である物への順応と考えられる。

さて長々と八風山系玄武岩・平尾・森泉・開伽流山系輝石安山岩を中心に、石質と道具の関係、道具の性格について論じて来たが、まだまだ片手落ちの感がある。もう一步踏み込み、使用痕の状態や刃部形成角度、刃部形成位置等の問題を明確にすべきであった。今回そこまで論及できなかったのは残念ではあるが、今後の課題として記して終わりたい。

最後に、調査に携わっていただいた方々、本稿を書くにあたり助言して下さった方々に、心より感謝の意を表し、厚くお礼申し上げます。



遠景 (南より)



全景 (北より)



調査スナップ



J1号・J4号住居址(西上9)



J2号住居址(東上9)



J2号住居土相方(北より)



J2号住居土相方(南より)



J 2号住居址が淵方 (西より)



調査スナップ



J 3号住居址 (北より)



J 3号住居址 (北より)



J 3号住居址跡 (西より)



J 4号住居址跡 (南より)



J5号住居址(東より)



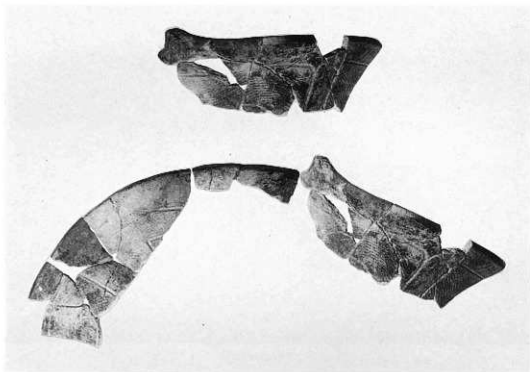
D1号土坑(東より)



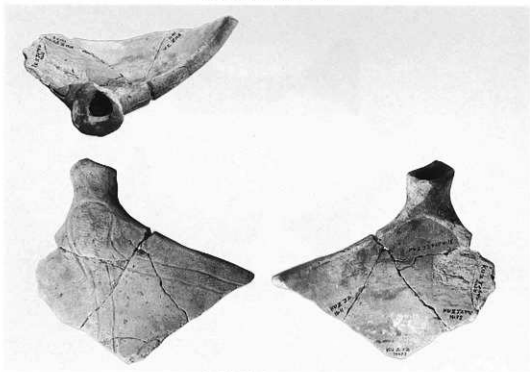
D2号土坑(東より)



J2号住居址出土土器 8-1



J 2 号住居址出土土器 8-4



J 2 号住居址出土土器 9-12



J 2号住居址出土土器 8-3



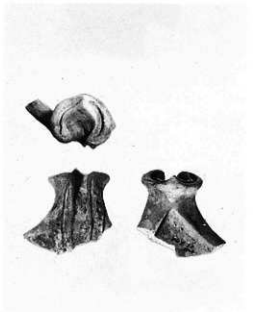
J 2号住居址出土土器 8-2



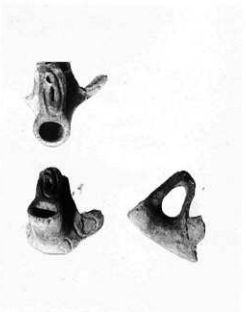
J 2号住居址出土土器 9-13



J 2号住居址出土土器 9-14



J 2号住居址出土土器 10-31



J 2号住居址出土土器 11-32



J 3号住居址出土土器 20-15



J 5号住居址出土土器 29-2

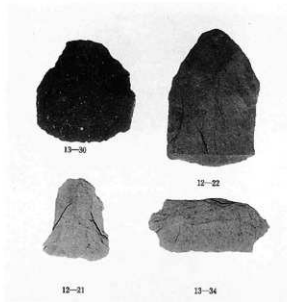


J 9号トレンチ出土土器 33-10

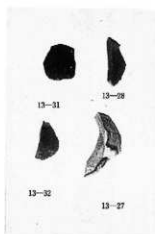
J 3号住居址出土土器 19-10・11・12



J 3号住居址出土土器 21-33



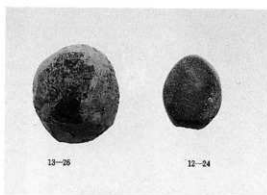
J 2号住居址出土石器 (1:3)



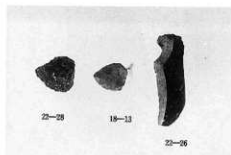
J 2号住居址出土石器
(1:3)



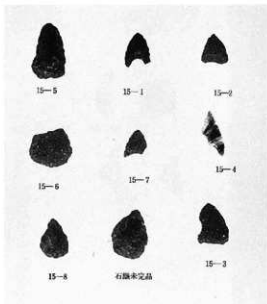
J 2号住居址出土石器 (1:2)



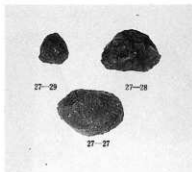
J 2号住居址出土石器 (1:3)



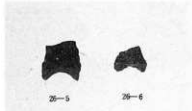
J 3号住居址出土石器 (1:3)



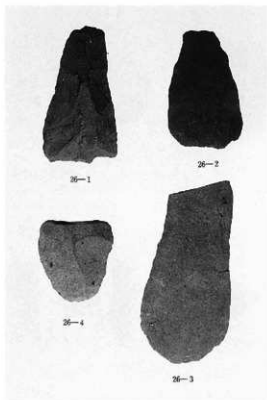
J 3号住居址出土石器 (1:2)



J 4号住居址出土石器 (1:3)



J 4号住居址出土石器 (1:2)



J 4号住居址出土石器 (1:3)



J 2号住居址西側 北より



第8号トレンチ 北より



第9号トレンチ 北より



第3号トレンチ 東より



トレンチ底下状況 北より



J2号住居址東部 北より



J2号住居址南側 北より



器ヲネ道跡近景 南より



調査風景



整理風景



調査区域民風景

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第21集
長野県佐久市

鶺 ヲ ネ 遺 跡

1990年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター
発行者 長野県佐久市教育委員会
印刷所 信毎書籍印刷株式会社
